



# 小説の未来 (18)

---

引きこもり

---

春日信彦

---

## 二種類の引きこもり

ひきこもりが、平成に入りますます社会問題化している。このひきこもりと言われる人たちは、いったいどういう人たちであろうか？引きこもりにも大きく分けて、二通りあるように思える。

一つ目は、経済的に親に依存し、学校にも行かず、会社にもいかず、自分の部屋に引きこもり、家族とも会話せず、数年間、他人とのコミュニケーションを拒絶している人たち。

二つ目は、経済的に親に依存し、学校にも行かず、会社にもいかず、自分の部屋に引きこもり、家の中でも家族と会話をしないのだが、ネットを使って、ネット上の他人とコミュニケーションをとるといふ”ネット娯楽”を持っている人たち。

彼らへの社会復帰支援について考えてみると、時事情報を入手し、ネット上の他人と意見交換をし、ネット娯楽で心を癒すことができている引きこもりの人たちは、まだわずかながら常識的心を維持できているように思われ、短期間の集団生活訓練で社会復帰できるかもしれません。

でも、ネット上の他人と意見交換をするというネット娯楽を持たない引きこもりの人たちは、精神的な問題が深刻化していると考えられます。彼らは、精神的に非常識化し、うつ病状態になっているのではないかと推測されます。この場合、精神科医による精神病治療と長期の社会復帰のための集団生活訓練が必要とされるでしょう。

特に成人の引きこもりは、将来的にますます大きな社会問題になっていくことでしょう。というのは、将来、必ず依存している両親がいなくなるからです。もし、彼らが社会復帰できなければ、無収入となりホームレスになる可能性が高くなることでしょう。

彼らへの救済手段として、生活保護制度がありますが、受給条件に適合しなければ受給の許可はありません。目に見えない若者に起きている深刻な引きこもり問題は、国家の問題として考えるべきではないでしょうか？国家は、一刻も早く、彼らを社会復帰させるための職業訓練学校制度を法制化すべきではないでしょうか。

## 引きこもりの仮想実験

これから、引きこもりの仮想実験をやってみましょう。被験者は、会社に勤めていて、通常の日常生活を行っている”あなた”です。

外部と交信できないように、あなたは、PCも、携帯電話も所持できません。そして、会社にかず、家族や友達とも会話せず、たった一人で部屋に引きこもっていただきます。このような生活を一か月間続けた場合、あなたは、いったいどのようなことを考えるでしょうか？

PCを使いたい。ネットサーフィンをしたい。メル友にメールを送りたい。オンラインゲームをしたい。スマホで友達と会話した。繁華街で買い物をしたい。好きなスポーツをしたい。家族と一緒に食事をしたい。一刻も早く会社に行って仕事をしたい。友達とワイワイおしゃべりをして騒ぎたい。同僚たちとお酒を飲みたい。パチンコをしたい。

上記のような、当たり前であった日常生活への復帰願望が起きることでしょう。そして、このような復帰願望がますます膨らんでいったとしても、これらの願望が実現されることがないという現実直面すれば、大きな不安が起き、パニックに陥ることでしょう。当然、息苦しい引きこもり生活から一刻も早く脱出したいと泣き叫び、破壊行為に出るでることでしょう。

## 引きこもりのマイナスとプラス

経済的に親に依存し、学校にも、会社にもいかず、両親や他人ともコミュニケーションをとらない、というこれらのことは、常識的にマイナスの面としてとらえられています。

引きこもるということは、非常識的な日常生活をすることです。つまり、常識的な心と行動を捨てることです。一般的には、非常識的な生活は、社会悪のようにとらえられていますが、短絡的に悪と決めつけていいもののでしょうか？引きこもりには、プラスの面はないのでしょうか？

今、引きこもっている人も引きこもりと言われていない人も、常識にとらわれず引きこもりのプラスの面について考えてみてはどうでしょう。

引きこもりの人たちは、気が変になりそうな不安におびえながら、耐えながら、これらの不安から逃れたいともがきながら、日々生活していることでしょう。また、自己嫌悪に陥り、自暴自棄になり、凶暴な心理に陥っている人は多いことでしょう。

確かに、非常識的な生活をもたらす大きな不安は、引きこもりの人たちの心に自殺や殺害というような生死にかかわるマイナス的な心理を生み出す場合があるでしょう。でも、私は、マイナスだけではないと思っています。

プラスの面として、引きこもりという非常識的生活の経験を”真摯に考察した人たち”にとっては、常識的生活の客観視を可能とし、また、今まで当たり前であると信じ込んでいた社会的一般常識も客観視できるようになると思われます。

そして、今までと違った人間観や社会観が生まれ、新たな人間関係を作り出すことができるでしょう。また、今まで気づかなかった自分の長所にも気づき、新たな人生を発見することでしょう。

## 精神的引きこもり

自活はできているが、外部との交流を極力拒絶している人たちについて考えてみると、彼らも一種の引きこもりと考えられるのではないのでしょうか？例えば、私のようなアマの小説家です。

自分に関していえば、人との交際によって起きる不安や不快感を極力避けたい性格で、高校の頃から孤独を好み、自分勝手な社会思想を作り、さらに、自分を慰めるための誇大妄想を楽しみ、今でもひっそりと小説を書き続けている。これは、精神的引きこもりと言えないだろうか？

学校に行って、就職して、自活したから、世間からは引きこもりとは言われなかった。でも、自分でいうのもなんだが、今でも、自分は常識になじめない精神的引きこもりだと思っている。

なぜ、引きこもりに陥るのか？それは、人とのかかわりで”嫌な思い”をしたくないからです。学校に行けば、他の生徒と先生から、バカだとか、ネクラだとか、クサイだとか、ブスだとか、靴に画びょうを入れられたりとか、殴られたりとか、恐喝されたりとか、様々ないじめを受ける。部活では監督や他の部員にもっと必死に頑張れと非難される。会社では、仕事ができず同僚から非難され、上司からクビにするぞとパワハラを受ける。

上記のような不愉快な状態が続けば、誰しも学校や会社にはいきたくない気持ちになってしまう。そして、自分が傷つかないように、自己防衛として家の中に引きこもる。さらに、家族から引きこもりを非難されると、家族とも会話をしなくなる。

私の場合、幸運にも自活できた。だから、世間でいう引きこもりではないかもしれない。でも、やはり、精神的引きこもりだと思う。なぜか、それは、対人関係がもたらす恐怖や不安から身を守ろうと精神的に逃避しているからです。



内在する恐怖や不安は、そう簡単に消え去ることはない。だから、人は恐怖や不安を感じないようにするために、また、自分をいやすために、何らかの対策を取ろうとする。例えば、夢中でゲームを何時間もする。多量のお酒を飲んで酔っ払う。宗教にのめりこむ。ほとんど毎日パチンコをする。

恐怖や不安から逃避しようとする引きこもりの心理は、自活できている人たちでも、起きていると思います。人それぞれに、引きこもりの方法が違うに過ぎないのではないのでしょうか？私の場合は、小説を書くという引きこもりと思っています。

あくまでも個人的な意見ですが、小説家は、自己の性格と常識に対峙する引きこもりだと思っています。でも、引きこもることによって得た様々な気持ちを言語化し、それらを発信する引きこもりです。

## 心の支えとなった小説

すでに述べたことですが、小説は架空の世界です。だから、実務的に日常生活に役に立つというわけではありません。だったら、小説は不必要ではないか？と思われそうですが、なぜか、小説は存続しているのです。それは、やはり娯楽として不可欠だからでしょう。

まず、小説とのかかわりについて述べますと、中学校までは、それほど小説に関心がありませんでした。小説に関心が起き始めたのは、高校に入ってからです。小説を書き始めたのは、高校2年生からだったように思います。

なぜ、小説を書くようになったのか？この点を考えてみると、今一つはっきりしないのですが、おそらく、学力不振による進学不安から、また、現実と対峙することからくる恐怖や不安から、可能な限り逃れたい一心で小説を書き始めたのではないかと思います。小説の世界は、架空の世界です。その自由で無限の世界に酔いしれたかったのでしょう。

今、振り返って思うと、小説を書くという心の支えがあったことは、思春期において奇跡的な幸運だったように思えます。もし、小説を書くことがなかったならば、自己嫌悪に陥り、引きこもりになっていたことでしょう。

## 小説を書く上での基本的技術

まず、小説を読むという点から考えてみると、読むのが好きになるのは、読んでいて楽しいからです。なぜ、読んでいると楽しいのでしょうか？個人差はあるでしょうが、思うに、小説が作り出したドラマで、読者が登場人物になって、恋愛できたり、名探偵になれるからではないでしょうか。

では、小説を書くということはどうでしょう。小説を書くということは、読者の言語力、理解度、感性を考慮しながら、自分の言語力で独自の架空の世界を作り上げるということです。

そこで、作品を構成していく上で基本的な技術があります。それは、一つの世界を作り上げていく場合、自分の好きな面と嫌いな面とを”同時に”書かなければならないという点です。

誰しも、愛される自分や尊敬される自分を書くことは好むでしょう。でも、反社会的な自分やバカにされる自分を書くのは嫌いでしょう。でも、一つの世界を作り上げていく過程では、”表の世界”と”裏の世界”を組み合わせて行かなければなりません。だから、どうしても、自分が不愉快になることも書く必要が出てくるのです。

## 小説を書くことの効用

簡単に言えば、”小説を書く”とは、自分を見つめ、解析し、自分独自の言語世界を創造していくことです。自分を見つめることは、簡単なようで、実はとても難しいことなのです。なぜなら、内在する恐怖や不安と闘わなければならないからです。

だからといって、小説を書くことは、困難なことだといってるわけではないのです。小説を書くということは、だれでも、いつでもできる最も手軽な自己表現なのです。常識と非常識、社会の表と裏、好きなことと嫌いなこと、を書くからこそ、自分の潜在的な可能性が見えてくるのです。

小説を書くことは、”常識という牢獄”から脱出するための一つの方法だと思っています。また、”常識と対峙することからくる恐怖や不安と闘うための武器”でもあるように思えます。

人は生きている限り、内在する恐怖や不安と闘い続けなければなりません。現在、恐怖や不安におびえる自分を自分ではどうすることもできず、時間を感じることもできない真っ暗な部屋に一人ぼっちでこもり、誰か助けてほしいと悲痛な思いで叫んでいる若者は多いことでしょう。

引きこもりから脱出できない人たちの中には、自分には何の価値もないと思っている人たちがいるかもしれません。今、ちょっと考えてみてください。本当に、価値のない人がいるのでしょうか？実は、あなたの価値を必要としている人々は、世界中にたくさんいるのです。

もし、自殺の衝動に駆られた時、ちょっと、窓の外の世界に広がる青空を見つめてください。そして、ほんの一文でもいいですから、気軽に、素直に、簡単な言葉で、小説を書き始めてください。

その時、自分が生きていることを感じるができると思います。そして、きっと、いままで気づかなかった恐怖や不安と闘える”強い自分”に出会えると確信しています。